化け狐は最強

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
化け狐は最強

【Ｎコード】
Ｎ６８２３Ｓ

【作者名】
黒猫

【あらすじ】
ナルトに憑依？！こんなチートな力まで！！！
俺がいる時点原作が変わってるから、いろんなフラグを折ってやんよ

プロローグ（前書き）

初めて描くのでおかしいとこがあると思いますが頑張ってかきます。
打ち間違いもあると思います。

更新は遅いです

プロローグ

俺、真白狂也（ましろきょうや）は死んだ。死因は車にひかれた。

目が覚めたら世界は真っ白だっだ。たしかに俺は死んだ。

『此処は何処だ……？』

俺は茫然としながら、その場で立ち止り呟いた。

まずは落ち着こう…深呼吸をしようとするが……息の仕方がわからない。

体が体じゃない感じだ…中身がすべてなくなった感じ。

たしか死んだら、お花畑や三途の川とかじゃなっかたか？

つーかおばーちゃんいないのか？？死んだら会えると思ったのに…

どのくらい時間が経ったのだろうか。全く時間が経っていないようにも、かなり時間が経ったようにも思える。

肉体がないからか？まあ、こんな空間の中にいればそんなことも些細なことだ。

ふと後ろを見ると黒い穴が空いていた。人が入れるぐらいの…

周りが白だから余計に黒く感じる。深い深い闇にも見える。

もしかして死者の入り口……とか？

たが俺の直感が違うと告げている。

その存在感はどこまでも静かで周りの空間の中にある一部分に見える。

だがなぜだろう。その吸い込まれるような闇はむしろこの空間を支配してる……この空間の心臓部と言ったほうがしっくり来てしまう……。

そんな気がした…

しかも、黒い穴がだんだん大きくなっている。……というより、多分俺が引っ張られている気がする…いやそうだ。

距離感なんて死んだ俺には分からないがな。

でも不思議と恐怖は全くといっていいほどなかった。

飲み込まれるならそれも一興…。

そしてとうとう視界全てが闇で覆い尽くされた。

こんな深い闇色があるなんてな……

そんなどこか他人ごとのような感想を抱いていると、

俺の“存在”が闇に浸食されだした。

いや、闇が流れこんで来たと言ったほうがいいかもしれない。

意識が飛ぶ直前、ああ、このまま宇宙のチリとかになるのか～……

と思いながら闇の流れに身を任せて意識を手放した。

プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございました

第1話（前書き）

もし何かアドバイスがありましたら、ぜひお願いします！

駄文ですが、これからも少しでも楽しんで頂けるように精進します！

暖かく見守って下さると嬉しいです＾ｍ＾

第1話

次に俺が目覚めたのは、目覚める前と同じ真っ白な世界だった。

だが、一つ違う事があった…。それは白い服白い髪白い髭のよぼよぼのおじさんがいた。

「誰がよぼよぼじゃ」

本当のことを言っただけだ…

て言うかあんた誰？此処何処だよ！てか俺死んだよな……！

「あぁお前さんは車にはねられてしんだぞ…此処は世界と世界の狭間じゃ！それから我は神じゃ！」

『ふーんっでなんで俺は此処にいるんだ？』

「それはのぉ我の代わりに神になって欲しいからじゃ！」

……はぁ？何言ってんだよこのじいさん…冗談はやめろよな……！

「それが冗談ではないんじゃよ…マジじゃ！！」

じじいがマジとかいうなよ；　キモいょ

『なんで俺なんだ？てか何で神になれって頼むんだ？』

俺じゃなくても他にいるだろ

「我は神の仕事を何億年もしているがもう寿命でのぉ神を誰かに代わってもらおうと思ったときにお前さんがいたからじゃ」

なるほど？なぁ～…神になったら俺なんでもできんじゃねーのか？

『神になったらなんでもできるのか？』

「ふむ、神になったらなんでもできるぞ」

『マジかよ！じゃあ喜んでやってやるよ！……あっ一つ条件がある
俺が神の力を使いこなせるように修行をつけてくれ！』

力が使いこなせなかったら神になった意味ねぇーじゃん

「それだけでいいんじゃな？ならお前さんは今日から神じゃ」

それから５００年後（飛ばし過ぎでごめんなさい）

弦（神）の修行はハードだったなぁ……

初めの修行は５００万Ｇの重力の中でいつも通りに過ごせなんて無理だろ…

潰れて何百万回死んだか……（遠い目）

５年たってやっと立てるようになり１０年たって歩けるようになって１５年たって走れるようになったなぁ……

いろいろあったなぁ……

あっそうそう

今日からＮＡＲＵＴＯの世界のナルトに憑依するんだ！

なんでＮＡＲＵＴＯかって？天界で人気の漫画だからさ！他

にもＲＥＢＯ●ｎやＯＮＥ　ＰＩ●ＣＥとかもあったけど一番気にいたのはＮＡＲＵＴＯだったからだよｗ

なんで天界にＮＡＲＵＴＯとかがあるんだ？ってそれは弦が人間界から見つけて面白かったから天界に持って帰ってきたら天界で人気になったんだ！

ということで憑依してきまーす

第1話（後書き）

見てくれてありがとうございます

設定（ネタバレ注意）（前書き）

題名通りでネタバレ注意。

設定（ネタバレ注意）

キャラ設定

主人公名：うずまきナルト　本名：真白狂也（ましろきょうや）

性格：馬鹿みたいに前向き、元気いっぱい（表）
自分を見下す人間をとことん嫌う。大切なものを傷つけると死刑決定
楽しければそれでいい。必要ないと思ったものには無関心（裏）

趣味：悪戯・新術・技の開発

容姿：原作と同じ。本当は金髪の肩より長いぐらい・蒼い瞳・ひげはない

忍術：すべて使える。血継限界も使える

強さ：神なので最強

強さを抑えるアクセサリーをつけている

ピアス　3（右）　2（左）

ブレスレット　1（右）　2（左）

ネックレス　１

指輪　２（右の中指と親指）　１（左の中指）

アクセを外している時の強さ　？？？？？？？

つけている時の強さ　？？？？？？

測定不可能

名：九皇（くおう）（九尾の人型）

性格：ツンデレキャラ。狂也（ナルト）大好き？　（本当は九尾）

容姿：金髪の腰より長い髪・金色の瞳、縦に瞳孔が開いていて、猫目。

スタイルは抜群

忍術：ほとんど使える。血継限界は使えない

強さ：九尾本体より少し強い

本体　５５０

人型　６５０

人型の方が動きが素早い、力のコントロールがしやすい。

〜〜〜火の国〜〜〜

サスケ
基本原作と同じ

サクラ
→と同じ

ヒナタ
ネジとは仲がいい（ヒザシは死んでいない設定）原作より強い。

キバ
基本原作と同じ

シノ
原作より強い、他は基本同じ

いの
シカマル
チョウジ
原作より強い、他は基本同じ

リー
原作より強い、仕込み武器と八門遁甲を用いる。

ネジ

ヒナタとは仲がいい　原作以上の白眼がある。

テンテン

強さはサクラと同じぐらい

暁一人の強さ　平均１５０

暁全員の強さ　　７５０

途中から原作と変わるかも知れません。

設定（ネタバレ注意）（後書き）

見て頂きありがとうございます

第2話（前書き）

もう、グダグダです～；

すみません＞（＿＿）＜

それでも良ければ読んでください

第2話

「卒業・・・おめでとう」
『！！』

……あちゃぁ～憑依する時間、まちがえたぜぇ・・・・・
ミズキを倒した後にイルカ先生に言われた言葉だ。
それにしてもこんな所でこんな場面の時に憑依するなんて……
そんな事を考えているとイルカが、
「・・・い！おい！ナルト！どうしたんだ？黙り込んで」
と聞いてきた。どうやら俺はずいぶん考え込んでたようだ。

よしっ！　演技、演技

『吃驚しすぎて、呆然としてたってばよ』
よかった、ちゃんとナルトになれてる。

「そうか、ならいい。よーし今日は卒業祝だ！一楽のラーメンを奢ってやる！！」

えっ！マジ！！漫画読んでる時から行ってみたかったんだよなぁ～
『うっしゃぁー！！今日はいっぱい食べるってばよ』
「ほら！さっさと一楽に行くぞ」

と言われ、とりあえず一楽に行く事にした。

そしてラーメンを食べ終わり……

「ナルトー、家には暗くならないうちに帰るんだぞー」

『わかってるってばよー、じゃぁなーイルカせんせー』

〜〜家に帰って〜〜

まず、九尾に挨拶に行かないとな。

精神世界に行ったらいるんだっけ？まぁ適当に探すか・・・

ベチャン、ベチャン

へぇー此処が九尾のいる所かぁ〜　　下水道みたいな場所だな……

「お主は誰じゃ」

あれ？思って以上に声が高い・・・

『俺？ナルト…もしくは狂也』

「ほぉ、この体の持ち主か…」

中からでもわかるんだ・・・・・

『おう！九尾、お前なんで此処にいるか知ってるか？』

「知っておる。うちはに術をかけられて、木の葉で暴れたから、お主の中に封印されたのじゃ…」

原作の九尾と全然違うなぁ…原作では出せ出せ五月蠅かったはず・・・

『九尾、お前って人型になれるか？』

夢小説でよくある九尾が人型になるやつ・・

「なれるぞ」

ボンッ

そこに現れたのは金髪で金色に瞳に金の耳と尻尾を9本でスタイルのいい九尾だった。

第2話（後書き）

ここらへんで終わります。

読んで頂き有難うございます

第3話

『綺麗だな…』

「なっ！何を言っておる／／／／／／」

うわぁ～すっげぇ顔が真っ赤だ…九尾も照れるんだ……

『顔、真っ赤だぞ』

と言うと九尾は両手で顔を隠して

「見るな／／／／」

九尾も以外に可愛いな…

なんて考えていると九尾が「お前さん何者じゃ？」と聞いてきた。

俺は顔が緩まないように我慢し

『何でそんな事聞くんだ？』

と疑問に疑問を返した。

九尾はさっきとは別人のように真剣に警戒しながら

「突然変わった…」

その言葉で理解できたけど解らないふりをして

『何がだ？』

と聞いた。

九尾は先程より警戒しながら其処らへんの強い奴でも簡単に失神するほどの殺気を出しながら

「人格、精神、雰囲気、中身、すべてが変わった！何もかも変った！！ナルトとは全然違う！お前何者じゃ！！！」

叫びように吐き出した。

でも俺にはそんな小さな殺気は効かず平然としていた。

逆に九尾がこんなにもナルトを大事にしていて俺《狂也》とナルトの違いがすぐに分った事に驚いている。

『へぇ〜、よく分ったな…俺はナルトじゃないよ。初めに真白狂也って言っただろ？その時点でナルトじゃないって築かないとな。フッ』

最後に鼻で笑うと

九「くっ！」

九尾は苦痛を感じたような声を上げた。

少し虐め過ぎたようだ…涙目になっている・・

可哀想なので正体を教えることにした。（最終的には言うけど）

『俺は神だ。』

と言うと急に言ったので九尾は放心状態になった。

第3話（後書き）

ここらへんで終わります。
短くてすみません
見ていただき有難うございます。

第４話（前書き）

感想ありがとうございｖ（・ω・）ｖ

第４話

九尾は放心してるとハッ！気を取り直して

「わ、我にそんな嘘は通用せん！」

しゃべり方で分かるように動揺している

『それが嘘じゃないんだよねぇそれに神様なんていない、なんて証拠がないだろ？』

此処にあるわけ無いはずのソファに座って

ニコニコというよりニヤニヤとしながら九尾の反応を楽しんでいる

「でも、我は神など信じぬ！」

と言うと狂也は何かをひらめいたようで手を合わせた

すると懐からナイフを出してグサッっと自分の心臓を刺した

「な、なにをし、しておる」

九尾は手をあわあわとさせながら動揺している

『ん？心臓を刺しただけだよ』

平然としながら言うとナイフを抜きナイフを振り付いた血を掃った

首を傾げながら

「痛くないのか？何故死なない？何故傷がない？我の力を使ってないのに…」

自分が理解できないことを次々に言う

『何度も言っただろ、神だからだ……これでも信じないというのか？』

少し呆れたようにいうと九尾は首をブンブン振り

「これを見て信じないのは逆におかしいぞ」

その言葉に納得したのか狂也は笑顔になる

『あっそうそう、九尾お前って名前ないのか？』

「あるぞ、九皇（くおう）、クシナに貰った名前じゃ」

満面の笑顔でえっへん！と自慢してきた

『じゃあ、今日から宜しくな。あと少しの間此処で（九尾の実力とこの体に慣れるための）修行するぞ』

※外の時間は止まっています

「なぜじゃ？」

九皇は修行しなくても我は強いと明らかに思っているていうか顔に

出てている

『人型になった回数は数回ぐらいしかないだろ？だからその姿に慣れてもらう為だな。それにもっと強くなって貰う為だな、いやか？』

九皇は首を横に振り

肩をポンポンと叩きながら

「ふむ。この姿には3回ほどしかなっておらんから疲れるのが速くてな……まぁいい修行するのは嫌いではないからな」

『それから九皇そのしゃべり方やめねぇ？その姿でそのしゃべりは似合わねぇからさ』

すると九皇は

「余計な御世話じゃーー！！」

と怒鳴った

「まぁいい、仕方ないから変えてあげるわよ」

少し？ツンデレ風なしゃべり方になった

『似合ってるよ…んじゃ修行始めっか』

3か月後・・・※外は時間がたっていません。

修行はいろんな世界の技を教えました

例）鬼道、念

『九皇、強くなったな』

頭をなでながら言う

「ふん！当たり前よ」

『んじゃ俺、外の世界に戻るな』

九皇は狂也に抱きついて

「うん。中からでも話せるから話しかける…ボソ）でないと寂しいからな…」

狂也は最後に言った言葉を聞こえないふりをして

『おう＾＾じゃあな』

第４話（後書き）

鬼道（ＢＬＥＡＣＨ）
念（ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ）
見ていただきありがとうございます。

第5話

翌日ナルトは合格者だけがくる説明会に来ていた。溜息をつきながら九皇に話しかけた。

『はぁ～めんどくせーやっぱ俺ってサスケとサクラの班だよなぁ？』

《まぁ、成績がドベだから仕方ないわよ》

『まぁな。俺がナルトに憑依したのはイルカから額あてを貰った時だからな…』

《そうだったな…でも成績がドベでも実力は最強だからいいんじゃない？》

ナルトに笑顔で言い返す。

《それに私は狂也がナルトに憑依してくれた事が今はうれしいぞ》

『サンキュ／／…』

満面の笑顔で言う九皇に照れながら感謝を述べる。

2人が話しているうちに教室についた。

ガラッ

ドアを開けると何人かがナルトに視線を向け、ナルトは視線を無視してサスケから離れた場所に座った。するとシカマルとチョウジが話しかけてきた。

「…ナルト、お前落ちたんじゃなかったのか？」

ナルトは原作通りに

『お前さ、お前さ、この額当てが目に入んねぇーのかよ…』

チョウジがそれだけでは理解できなかったようで聞き直した。

「でもナルトって落ちたよね？」

『特別試験みたいなのを受けたんだてばよ！』

「よかったね、合格できて」

お菓子を食べながら喜んでくれた。

「そうだな…でもめんどくせぇーこれから…」

など、色々話しているとイルカ先生が教室に入って来た。

「今日から君達は、めでたく一人前の忍者になったわけだが…しかし、まだまだ新米の下忍。
本当に大変なのはこれからだ！えーー…これからの君達には、里からの任務が与えられるわけだが、今後は3人1組（スリーマンセル）の班を作り……各班ごとに一人ずつ上忍の先生が付き、その先生の指導のもと、任務をこなしていくことになる。」

イルカ先生の長い話にナルトは寝そうになる。

《ナルト起きなろ～》

『ハッ！やべっ寝るとこだったぜ…』

「班の力のバランスが均等になるようこっちで決めた。」

「「「「「「えーーーー！！！」」」」」」

イルカ先生の言葉に卒業生が一斉に文句を言い、順番にチームを言われていく。

「じゃ次、7班　春野サクラ…うちはサスケ…うずまきナルト」

「しゃーんなろー！！！」

サクラは盛大に喜び

「フンッ」

サスケは鼻で笑い

『はぁ～最悪…』

ナルトは溜息をつき九皇に慰めてもらう

《どんまい…狂也》

（神の力使って未来変えようかな……）

「じゃみんな、午後から上忍の先生達を紹介するから、それまで解散！」

第6話（前書き）

今回は少し長めです。

第6話

その頃、ナルト達の担当上忍のカカシは三代目の所にいた。

「お主の班にはナルトと例のうちは一族のサスケもいるぞ、健闘を祈る！」

「了解」三代目に言われた班の内情を聞いて、大変なことになりそうだ…と冷や汗を流しながら応えた。

『遅せぇ…』

《こんなに人を待たせて何してるのよ！》

呆れ気味に言うナルトに怒り気味に九皇が言い返す。

待っているのも飽きたナルトが席を立ち、ドアの方へ向かっていき、ドアの上に黒板消しを仕掛ける。

「ちょっと！！何やってんのナルト！！」

ナルトに向かって怒鳴るサクラにサスケも目を向けた。

『ニシシ、遅れてくる人が悪いんだってばよ』

（起爆札でも付けるか？）

《うん。弱めのね、強すぎたらこっちにも被害がくるから。》

（了解！）

「ったくもー！私！知らないからね！！」（こうゆーのけっこー好

きなのよー！！）

「フン、上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ」

開き直るナルトにサクラが注意し、サスケもバカにしたように言うがその間もトラップを次々と仕掛けていくナルトに二人とも冷や汗を流している。

そのときちょうど三人の担当上忍であるはたけカカシが入ってきた…

ガラッ

ボフ

「！」ボカァン！！

黒板消しに付けた起爆札が起動し、普通の起爆札より弱い爆発が起きた。

「うわぁ！」カカシが煙で見えなくなった。

『先生ぇ、大丈夫ですかぁ？』（弱すぎた？）《まぁ、それぐらいでよくない？》（ならいいや。でも俺的にはもっと強力な起爆札使ったらよかったなぁっておもってんだよなぁ）《私的にはこれで十分だと思うがな……》（そう？ならいいや…）

ニヤニヤとしながら言う。

「キャー！？先生？ごめんなさい、私は止めたんですがナルト君が…」（ＯＫ！ＯＫ！読み通りのベタなオチー！！）

「……（これで本当に上忍か？頼りなさそうな奴だな…）」

サクラが上辺だけ謝り、サスケは簡単に罠にかかるカカシに呆れているとカカシが起き上がってきた。

「んーお前等の第一印象はぁ…大嫌いだ！！」

初っ端から嫌いだと言われて空気が重たくなった。

それから屋上に行き自己紹介を始めていた。

「それじゃあ…順番に自己紹介してもらおう」

「…どんなこと言えばいいの？」

何を言えば良いかわからずサクラがカカシに聞く。

「…そりゃあ好きなもの嫌いなもの…将来の夢とか趣味とか…ま！そんなのだ」

『じゃあ先生から初めてよ』（これからってドベの演技もお終いだな）《そうだな…ドベから最強…》（言い訳どうしようかな……）《適当でいいのよ！》（……）

「そうね…見た目ちょっと怪しいし」

ナルトが言うとサクラもカカシに言う。

「あ……オレか？オレははたけカカシって名前だ、好き嫌いをお前らに教える気はない！将来の夢…って言われてもなぁ…ま！趣味は色々だ……」

「ねぇ…結局分かったの……名前だけじゃない？…」

そんなサクラの言うことも気にせず先に進ませるカカシ

「じゃ、次はお前らだ。右から順に…」

『名前はうずまきナルト。好きなものは九皇。嫌いなものはいろいろ（ありすぎて）。将来の夢は今のところ特にない。趣味は悪戯（人で遊ぶ）・新術・技の開発　ボソ）忍びを舐めるな。敵は迷わず殺す。一時の迷いが仲間を殺す。チームワークが大切だ。』《私も狂也が好きだぞ！それから最後に言った事ってカカシに好印象を与える為か？》（あぁ…）

（名前は真白狂也。好きなものは九皇と弦（師匠だから）。嫌いはものはいろいろ。将来の夢はない（叶えようと思ったらなんでも叶うから）。趣味は人で遊ぶ（最後に殺す）。新しい能力を作る。）

「九皇って？」

『それは内緒だ。』

サクラが疑問に思ったことを聞いたが教えてくれなかった。

「…新術？…（資料で見たナルトとは全然違うな…ドベは演技だったのか？……最後に言った言葉は好かった）」

ナルトはカカシに好印象を与えた。

『それも内緒だ…』

「なるほど…次！」

「名はうちはサスケ、嫌いなものならたくさんあるが好きなものはべつにない。それから…夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある！一族の復興とある男を必ず…殺すことだ」

（かっこいい…？）

（イタチも可哀相なだなぁ）

（復讐など虚しいだけなのになぁ…まぁ、私もマダラを必ず殺す！）

（……やはりな…）

「よし…じゃ、最後女の子……」

「私は春野サクラ。好きなものはぁ……ってゆーかあ、好きな人は…えーとぉ…将来の夢も言っちゃおうかなぁ…キャー！！」

「……」

カカシが呆れている。

「嫌いなものはナルトです」

（俺もお前が嫌いだから別にいいけど）《私も嫌いだ！ヒナタの方が何倍も可愛いわ！》（それわかる！）

「趣味はぁ…」

「（この年頃の女の子は…忍術より恋愛だな）よし！自己紹介はそこまでだ、明日から任務やるぞ」

『任務？何するの？』

分かっているがナルトがカカシに聞く。

「まずはこの四人だけであることをやる」

『何？』

「サバイバル演習だ」

『ふーん』

「……」

「何で任務で演習やんのよ？演習なら忍者学校でさんざんやったわよ！」

カカシの言葉に知っていたナルトは興味なさそうに言い、サスケは無言。サクラは文句を言った。

「相手はオレだがただの演習じゃない」

「「？」」

『それで？』

「……、ククク……」

「ちょっと！何がおかしいのよ先生！？」

「いや…ま！ただな……俺がこれ言ったらお前ら絶対引くから」

『……すでに引いてるから…』

「……卒業生二十七名中下忍と認められる者はわずか九名。残りは再びアカデミーへ戻される。この演習は脱落率六十六％以上の超難関テストだ！」

『……（無視すんなよ！変態！）』

「……ヒク」「……」

「ハハハ、ホラ引いた。…ナルト、お前は驚いてないのか？」

あんまり驚いてなかったナルトにカカシが聞く。

『いや、アカデミー出ただけで忍者になったって死にに行くだけだし。普通もっと忍者が増えてるだろ？』

「まぁ、そういうことだ、卒業試験は下忍になる可能性のある者を選抜するだけだからな。とにかく明日は演習場でお前等の合否を判断する、忍び道具一式持って来い。それと朝飯はぬいてこい…吐くぞ！詳しいことはプリントに書いといたから明日遅れてこないよーに！」

『（めんどくさいな、こんなんじゃこいつら失格だな。まぁなんとかなるか。《それくらいいいじゃろ？明日から少しは力を出せるんじゃからな》うん少し楽しみだ）』

「吐くって！？そんなにキツイの！？（…けどこの試験に落ちたらサスケ君と離ればなれになっちゃう…これは愛の試練だわ！！）」

カカシからプリントを貰いながらナルトが心の中で玉藻と話しているとサクラが試験の厳しさに絶叫し、そのまま解散となった

第7話

次の日、ナルトは九皇の作った朝ごはんを食べて二時間遅れて集合場所にきた。

『早いな二人とも、おはよ。』

「遅いわよナルト！！」

「……フン」

サクラが文句を言ってきたので理由を言う。

『初日で遅れてきた奴が集合時間に来るわけ無いだろ。だから遅れて来た。』

「うっ…それは…」

それだけ言うと、ナルトは木に上って太い枝に座って目を瞑り、九皇に話しかけた。

（どういう風に戦おうか？俺的には、神の不在証明（パーフェクトプラン）か束縛する中指の鎖（チェーンジェイル）を使おうと思ってるんだけど……）

《神の不在証明（パーフェクトプラン）は怪しまれると思うぞ！忍術でそういうのはないしな…、神速（カンムル）を使って鈴を取った方が楽だと私は思う。》

（あぁ～神速（カンムル）もあったな…、でも電気がないから無理だろ……）

《そうだな…楽に物体テレポートのアリスでも使ちゃえば？》

（その方が怪しまれるだろ！！）

《う～ん…あっ！！曲絃糸！曲絃糸だ！！》

（？…曲絃糸がどうした？）

《曲絃糸で鈴を取ったら楽だよ！！》

（…！！そうだな！じゃあ、曲絃糸で決定だな。）

どういう風に戦うか決まったら、カカシが手を振って来た。

「やー諸君おはよう！」

「おっそーい！！！」

『（カカシって来るタイミングなんかいいよな）』《私も思った！》

遅れてきたカカシにサクラが怒鳴り、サスケは黙り、ナルトは九皇としゃべっていた。

カチッ

「よし！12時セットOK！！」

「「？」」

『……』

いきなり話し出したカカシにサクラとサスケは疑問に思いナルトは沈黙していた。

「ここに鈴が二つある…これを俺から昼までに奪い取ることが課題

だ。もし昼までにオレからスズを奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食うから」

ぎゅるるるるる

（朝飯食うなって…そうことだったのね）

『（食べてきてよかった）』

サクラとサスケの腹が鳴る。ナルトは食べてよかったと思った。

「スズは一人1つでいい。2つしかないから…必然的に一人丸太行きになる。…で！スズを取れない奴は任務失格ってことで失格だ！つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ…手裏剣も使っていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな」

「でも！！危ないわよ先生！！」

カカシに危ないと言うサクラにナルトが質問する。

『（だから甘いんだよ…）何使ってもいいんだな？』

「…いいぞ」

「何言ってんのよナルト！？」

『上忍にまだ下忍にもなってない奴が勝てると思ってんのか？』

サクラに目線を向けながら、ナルトの手首から先がぶれる。自然な動作でクナイを投げる。

「少し気が早いんじゃないか？ナルト」

カカシの声を聞いたサクラとサスケがカカシとナルトの方を交互に見ると、カカシの左手にクナイが握られていた。

『あいつら二人が上忍の実力を過小評価しているから解らせてやっただけだ…』

そう言ったナルトに二人はカカシの左手にあるクナイはナルトが投げたものだと気付き驚いた。

―嘘…いつ投げたの？

―この俺が気付つかなかっただと…？

「あれだけ自然な動作とタイミングで投げるのは中忍でも厳しいぞ」

『じゃあ、それを普通に掴む先生は流石だな』

「まぁ、上忍だからね。でも殺気も出さずによく投げられるね」

『当たらないと分かっているのに殺気を出しても意味ないよ』

「そうか…じゃあそろそろ始めるか。やっとオレを認めてくれたみたいだしな、ククク…やっとお前らを好きになれそうだ…じゃ始めるぞ……よーい…スタート！！！」

ナルトとサスケとサクラは気を引き締めてスタートと同時に散っていった。カカシは少し考え込んでから歩き出した。

—やはりナルトのドベは演技か…ドベのナルトにできるはずがないからな…

「忍たる者—基本は気配を消しかくれるべし」

—よしみんなうまく隠れたな

―ナルト―

（九皇俺、木の上で寝ているからカカシが来たら起こしてくれ…）

《わかった！》

―サクラ―

サクラは木々をかき分けてサスケを探す。

「（…サスケ君…何処にいるのかな？…まさかもう先生に……イヤ！サスケ君に限ってそんなことないわよねっ！）」

ガサッ　ザッ！！

サクラはカカシを見つけ葉や草の中に隠れる。

「（…セーフ、気づかれてない…）」

「サクラ、後ろ」

「えっ！？」

ドン　ザワ　ザザ　ザザ

サクラの目の前にカカシが現れ、サクラに幻術をかける。

「！！え！？えっ！？今の何！？どうなってんの！？先生は！？」

木の影から

「サクラ…」

「（この声は…）！サスケ君！！」

「…サ……サク…ラぁ…た…助けて…くれ……」

そこにはクナイや手裏剣が体中に刺さっていて、左腕がなく、足が逆の方向に折れているサスケがいた。

「あぎゃあぁあああぁあ！！！」

それを見たサクラは悲鳴をあげて、口から泡を吹いて失神した。

ドサッ

「少しやりすぎたか…」

―サスケ―

「！！…今の声　サクラか…」

するとカカシが木の物陰から話す。

「忍戦術の心得その２　幻術……サクラの奴簡単ひっかかっちゃってな……」

「（幻術か…一種の幻覚催眠法…あいつならひっかかるのも無理ねーな……しかし…）オレはあいつらとは違うぜ…」

ザァ・・　風が吹く

「そういうのは鈴を取ってからにしろ　サスケ君…」

サスケの戦う場面を書くのは大変なので飛ばします…すみません……。

「忍…戦術の心得その3！　忍術だ…にしてもお前はやっぱ早くも頭角を現してきたかでも、ま！
出る杭は打たれるって言うしな　ハハハ」

そういうとスタスタと去っていった

「くそっ！！」

第7話（後書き）

HUNTER×HUNTER
神の存在証明（パーフェクトプラン）
束縛する中指の鎖（チェーンジェイル）
神速（カンムル）

学園アリス
物体テレポートのアリス

戯言シリーズ
曲絃糸

第8話

―ナルト―

《ナルト起きろもうすぐカカシが来るわよ！！》

『ふぁ～おはよ……１００m先にカカシがいるな』

《瞬身の術を使ってるからすぐ来るわ》

「見つけたぞナルト。

鈴取りの前に聞きたい事がある・・・」

『ドベの演技をしていた事だろ？』

「！…あぁ…」

『ドベの振りをしてる方が動きやすかったからだ…』

《嘘だよねそれ…》（あぁ嘘だ。俺ドベの振りなんて憑依した時と説明会の時以外したことないからな…それにナルトは本当にドベだったからな…）《お主も悪やのぅ》（何そのキャラ！）《なんとな

くだ》

『じゃ俺、先に丸太の所で待ってるな…』

「待て。鈴をまだ取ってないだろ…」

チリン

『これでいいだろ？』

ナルトの持っている鈴を見るとすぐに腰に付けている鈴を見た

「なっ！いつのまに！！！」

『さぁな』

そう言うとスタスタとナルトは去っていった

第8話（後書き）

短くてすみません。

第9話

「この演習についてだが…ま！お前らはアカデミーに戻る必要もないな」

『……』

「（え？私…気絶してただけなんだけど…いいのかなあれで）」

―愛は勝つ！しゃーんなろ！！

「フン」

ナルトは沈黙して、サクラは疑問に思ったが良いことなので流し、サスケは当然だというふうな感じだったが、次のカカシの言葉にサクラとサスケは驚いた。ナルトは当たり前だと思い二人に呆れていた。

「…ナルト以外…忍者をやめろ！」

場の空気が凍りついた。

「「！？」」

『……』

サスケ、サクラの顔が強張り、ナルトは無表情のままだった。それをカカシは笑顔を張り付けて無言で見ていた。

「どういうこと！？…確かに鈴は取れなかったけど！何で忍者をやめろとまで言われなきゃいけないの！？それにナルトだけ何で！？」

「何でって…どいつもこいつも忍者になる資格の無いガキだってことだよ…それにナルトは一人で鈴を取ったぞ」

カカシが表情を変えてわざと挑発するかのように言う。

それを聞いたサスケの体が少し震え、何かを耐えるように歯を食いしばる。

「優秀な奴が集まった班と聞いたが使えるのドベのナルトだけかぁ？」

『（もうドベじゃないんだけどなぁ…）』

ダンッ！！

サスケがその挑発に耐えきれなくなったのか地面を大きく蹴り、カカシに飛びかかる

『（挑発されるとキレる…まだまだ子供だな…）』

「サスケ君！！」

サクラが叫ぶがカカシがサスケの左手を掴み地面に押しつけ頭を踏み、サスケの上に座った。

「だからガキだってんだ」

『はぁ～…』

「サスケ君を踏むなんてダメー！！！！」

「ぐっ」

「お前ら忍者なめてんのか…あ！？何の為に班ごとのチームに分けて演習やってるとおもってる」

叫ぶサクラとこちらを睨みつけるサスケを無視してカカシが話始める。

「え！？…どーゆーこと？」

「つまり……お前らはこの試験の答えをまるで理解していない……」

「だから…さっきからそれが聞きたいんです」

『…チームワークだ』

サクラがカカシに聞いたがナルトが先に答えを言った。それを聞いて三人がナルトに視線を向ける。

「何で鈴二つしかないのにチームワークなわけぇ？そんなのチームワークどころか仲間割れよ！」

そんなナルトにサクラが大きな声を上げる。カカシは静かにその様子を見ていた。

『当たり前だろ。これはわざと仲間割れするように仕組まれた試験だからな…下忍でもない奴が普通は上忍から鈴を取れるわけないんだよ』

「じゃあなんでナルトは先生から鈴を取れたのよ！」

『俺の方が強いからじゃね』

《疑問文なのに疑問になってない！》

「この試験は仕組まれた状況下でもなお、自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だった。」

「ナルトは予想外だったが…
…サクラ…お前は目の前のナルトじゃなく、何処にいるかも分からないサスケのことばかり。
サスケ！お前は二人を足手まといと決めつけ個人プレイ。
任務は班で行う！確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。
が、それ以上に重要視されるのは“チームワーク”
チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、殺すことになる…例えばだ…サクラ！ナルトを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ」

カカシがクナイをサスケの首に押しつけサクラに言う。

「！！」

ナルトとサスケを交互に見る

『（おい！こいつマジで俺の事殺そうか考えてるぞ…）』

「と…こうなる。人質に取られた挙げ句、無理な二択を迫られ殺される。
任務は命がけの仕事ばかりだ
お前らに最後のチャンスを与える。ただし昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ！挑戦したい奴だけ弁当を食え、ただしサスケには食わせるな。サスケは丸太に縛り付けておくからな。もし食べさせたらその時点で試験失格にする。ここではオレがルールだ、分かったな。ナルトは食べたらかえっていいぞ」

―もし帰ったらしょうがないが失格にするしかないな…

カカシは内心そう思いサスケを縛って消えていった。

『ふぅ～…やっと行ったか…』

のびーとしながら少しリラクッスして弁当を持ってサスケの前に座る

「おいっ！なんで俺のま「ムグッ」」

「なにすん「グイッ」」

「お「ムグッ」」

サスケの言葉を遮って無理やり弁当を食べさす

「ナ、ナルト！さっき先生が！！」

『腹が減っては戦はできぬって言うだろ…それに腹の音なんて鳴らしてたら足手まといだ…』

「（ナルト…）サスケ君！私のお弁当もあげる！！」

「フンッ…／／」

ボン！！！

「お前らあぁあ！！」

『……』

「！」

「きゃあああぁ」

急に煙を撒き散らし叫びながら走ってくるカカシ、ナルトは知っていたので無反応、サスケは驚き、サクラは叫ぶ

「ごーかっく！」

「え！？……」

『……』

「……」

ハートがつきそうなカカシの笑顔にサクラは驚きナルトは引きサスケは無言で睨む

「合格!?なんで!?」

「お前らが初めてだ。今までの奴らは素直にオレの言うことを聞くだけのボンクラどもばかりだったからな……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。……けどな!仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ!」

「アハ…」

「フン」

『（終わりよければ全てよし！）』

カカシの言葉にサクラは喜び、サスケは鼻で笑う。ナルトは黙っていたが内心喜んでいた？

「これにて演習終わり。全員合格！！よォーしィ！第七班は明日より任務開始だァ！！！」

第１０話

「狂也…此処は何処…？」

俺達は今、真っ白な空間に二人っきりでいる。

『うーん…簡単に言うとだな、此処は俺の空間で俺の世界だ。』

「？？…それは此処が狂也の作った世界ということか？」

『あぁ、そうだ…頭の回転が速いと助かる。説明するのがめんどうだからな…』

そう、この世界は俺が作った世界。

簡単に物が作り出せ、消すことも可能。

それ以外でも、俺が願ったことはなんでも叶う。

まぁ、俺が安心して過ごせる部屋といったらいいかな。

「ふぅん…便利なところね…」

『まぁな…俺の世界だからな…』

「で…なんで私は此処にいるの？」

『それはだな……俺がドベの演技がバレた？だろ…』

カカシとの鈴取りでバラしたっと言ってもいい…

「えぇ…それと此処にいる理由は関係ないでしょ？」

『いや…関係ないことはない』

『俺がドベのふりをしていた記憶を消そうと思ってるんだ…』

「！？…どうして？記憶を消したら、ドベの時のナルトの記憶がなくなって…
その記憶だけすっぽりと空いてしまうじゃない……」

『そう…でもその空いた記憶にドベじゃないナルトの記憶を入れようと思うんだか…』

「それって狂也が後から、ドベのフリをしていた事を聞かれるのがいやだからじゃないの？」

簡単に言うとそうだからだ。

『あぁ…だってめんどくさいからな…一々答えるのに』

「まぁ…いいんじゃないの？私は別にいやじゃないから…」

『ん…サンキュ』

九皇が少し不安そうな顔で

「狂也…私の記憶も消すの…？」

微笑みながら

『いや…消さないよ…それとも…消してほしい？』

「いやだ！！私は……私はたとえナルトがみんなの記憶から消えても…私の記憶だけでいいから、
残しておいてあげたい…」

『いいよ。九皇の記憶は消さない。それに初めから消すつもりはないからね…』

思いだしたように

『でも、みんなの記憶に入れる記憶を九皇にも入れるよ…？』

「あぁ…わかった」

『じゃあ…九皇、戻ろうか』

「うん！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6823s/

化け狐は最強

2011年11月22日02時53分発行